様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月　 ６ 日現在

機関番号：６２６０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７０２６０

研究課題名（和文）１７世紀歌舞伎の演技・演出―文献資料・絵画資料・民俗資料による総合研究―

研究課題名（英文）A study of Acting and Direction in 17th century Kabuki

研究代表者
武井　協三（TAKEI, Kyozo）

国文学研究資料館・その他部局等・名誉教授

研究者番号：６０１０５５６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：17世紀歌舞伎の演技・演出を文献資料・絵画資料・民俗資料によって総合的に解明した。大名家の日記、『役者絵づくし』などの芝居絵本、佃島の盆踊りなどによって、１７世紀の歌舞伎の演技・演出の実態を明らかにした。さらに歌舞伎という演劇の特質を摘出し、歌舞伎の本質に迫った。その成果を研究書『歌舞伎とはいかなる演劇か』（全329頁、八木書店、2017年６月）によって発表した。

研究成果の概要（英文）：I researched acting and direction in 17th century Kabuki by using synthetically documentary materials, pictorial materials and folklore materials. Through research of diaries of feudal lords, theater book "Yakusha Ye-zukushi" and the "Bon"Festival dance at Tsukudajima, I was able to show some of the actual condition of 17th century Kabuki. Through this study, I was able to get seven fundamental characters of kabuki. And I published a research book " What is Kabuki?" (329pages, by Yagi shoten,June 2017) .

研究分野：人文学

キーワード：近世文学　歌舞伎　人形浄瑠璃　17世紀　役者絵づくし　演技・演出　佃島盆踊り　藩邸日記

１．研究開始当初の背景
本研究では、17 世紀の歌舞伎を演技・演出という視点から研究した。舞台上で実際にどのようなことが行われていたかを見るのが、演技・演出の研究である。この視点は歌舞伎研究の中核となるべきでありながら、資料の不足のため成果が乏しかった。これが研究開始当初の背景である。

２．研究の目的
本研究の目的は 17 世紀歌舞伎の演技・演出を明らかにすることにある。17 世紀の初頭に誕生した歌舞伎の演技・演出を解明することは、歌舞伎が、どのような性格を持って生まれてきたかを解明することにつながるだろう。これは歌舞伎という我が国固有の芸能の本質を究明するための確固たる導入部になるはずである。文化は人間の生を豊かにするものだが、芸能は文化の重要な一翼をになっている。したがって、歌舞伎を研究する本研究の目的は、巨視的に言えば、人間の生き方を豊かにすることにある。

３．研究の方法
歌舞伎研究においては、文学研究の範疇として作品の研究が行われ、歴史研究の範疇として興行史の研究が行われてきた。本研究は、この二つの研究の流れが閑却してきた演技・演出という側面に視点を置く。また、文献資料・絵画資料・民俗資料を総合的に用いることによって、文学研究、歴史研究が見落としてきた 17 世紀歌舞伎の実態に迫ろうとするものである。とくに新出の文献資料『役者絵づくし』を用いて、新たな展望を開く。

４．研究成果
本研究では、17 世紀歌舞伎の演技・演出を研究することにより、歌舞伎という演劇の本質を究明した。その結果、「かぶき者」「当代性」「断片性」「饗宴性」「好色性・売色性」「女方」「見立て」の七つを、歌舞伎の本質的特質として摘出することができた。もとより、これらのみで歌舞伎の本質すべてを尽しているわけではないが、本研究の成果として『歌舞伎とはいかなる演劇か』（全 329 頁、八木書店、2017 年６月）を刊行することができた。同書は、読売新聞（2017 年 7 月 25 日朝刊）毎日新聞（2017 年 7 月 30 日朝刊）朝日新聞（2017 年 9 月 7 日夕刊）などに取り上げられ、演劇評論家の渡辺保によって「2017 年この３冊」に選定され「歌舞伎の魅力を問い直した好著」「研究のレベルも高く」と評された（毎日新聞 2017 年 12 月 17 日朝刊）。
　以下、研究成果として摘出した七つの特質について記す。
(1)「かぶき者」
　歌舞伎は誕生の当初から「かぶき者」をその舞台に登場させた。かぶき者とは、派手な異装に身を包み、巷間での喧嘩闘争をもっぱらにした、当時のアウトロウたちである。江戸幕府による統制からはみ出す彼らは「かぶき者」と呼ばれ、その典型的な姿は「彦根屏風」に、体を「く」の字にかたむけ扇をつまみ下げる若者として描かれている。舞台に登場したかぶき者は、17 世紀の中頃から雁金文七、幡隋院長兵衛など「町奴」と呼ばれる異端の侠客たちに受け継がれる。歌舞伎は彼らを主役に迎え、その後も連綿として謀反人や犯罪者を舞台上で活躍させる。舞台に「かぶき者」が登場することは、「歌舞伎」という芸能の名称をも生み出し、この演劇の大きな特色となるのである。
(2)「当代性」
　当代の流行風俗を写し取るということが、歌舞伎の特色であることを解明した。「当代」というのは、その時代時代における「現代」ということである。元禄時代なら元禄時代、明治時代なら明治時代の現代風俗、最先端の流行を、歌舞伎は写した。演劇にその時代の現代人の風俗が登場するのはあたりまえのようだが、能楽などの先行芸能に登場するのは、一時代前の武人や佳人、あるいは伝説上の人物だった。歌舞伎は同時代の流行風俗を写し、その時代の同時代人を登場させた。
　フランス国立図書館蔵の『としの花』（1691 年）という本は、最先端のファッションを紹介する一種のスタイル・ブックである。流行の衣装に身を包むモデルとして描かれているのは、当時の人気役者たちであり、先端的な流行風俗と歌舞伎の関係の深さが知られる。
　『役者絵づくし』という本はシカゴ美術館本が元禄元年（1688）の刊行、国文学研究資料館本が元禄 14 年（1701）刊行の後刷り版である。同じ板木による本なので、両者の絵にはほとんど違いがない。ただ、頭髪の部分のみが異なる役者の絵を、シカゴ美術館で発見した。元禄元年から 14 年の間に、髪型の流行には変遷があり、元禄元年本の髪型ではもはや流行遅れであったため、14 年版では、象眼（埋木）という手間のかかる操作を板木に加え、役者の絵姿を元禄 14 年段階での流行の髪型に訂正しているのである。
　また、江戸時代中期には「伊達風流娘」と呼ばれる、今風のファッションに身を包み、色恋にあこがれる、おしゃれで活発な娘たちが江戸の町を闊歩していた。瀬川菊之丞（二代目）という女方は、伊達風流娘たちの風俗を写して登場し人気を博した。さらに江戸後期の鶴屋南北の舞台には「藤八五文売り」という薬売りが登場する。これはまさにそのとき劇場の外で、女性に人気があった、いなせな服装をした行商の姿を写すものであった。
　歌舞伎はこのように「当代」を舞台にのせるものであったが、現代の歌舞伎にもそれが生きている。ある特定の場面では、お殿様がスマートフォンを取りだして、観客を喜ばせたりするのである。歌舞伎は古典演劇であるが、その古典の中に、現代を取り入れる枠が用意されているのである。ちなみに歌舞伎の

生まれ故郷を彷彿させる佃島の盆踊りでは、踊り手がメイドの扮装をするなど、最新流行のファッションが見られる。

本研究は、このように「時代の旬を描くのが歌舞伎だ」ということを明らかにしている。

(3)「断片性」

歌舞伎はストーリーの分からない不思議な演劇である。それは、全体の筋を通さず、人気のある場面だけを抜粋する「みどり」という上演方式をとっているためである。よく知られている演目『仮名手本忠臣蔵』でも、物語の決着をつけるはずの最後の仇討ちの場面は、ほとんど上演されてこなかった。途中の一、二幕が上演されるのみで、これが終わるとプログラムは次の演目に移ってしまう。歌舞伎は断片を集積する演劇なのである。

なぜこのような不親切きわまりない上演方式が、大手を振ってまかり通っているのか。それは発生期の歌舞伎が「芸尽し」という、それぞれの役者の得意芸の羅列で構成されていたからである。このＤＮＡを歌舞伎は忘れることができないため、物語の筋よりも役者の芸を、歌舞伎では重視してきた。本研究では「みどり」上演方式が、大名屋敷の座敷芝居におけるリクエスト上演にあることを発見した。座敷芝居では一通りの上演が済んだ後、お殿様や奥方様がアンコールのリクエストを行う。このアンコールの場では、お殿様奥方様それぞれのお好みの場面、いわば「見どころ尽し」となるのである。

筋の分からない歌舞伎が今でも許容されるのは、こういった上演の歴史に胚胎するのだと、本研究は明らかにしている。

(4)「饗宴性」

現代の歌舞伎では、舞台と客席は画然と分けられ、両者の直接的な交流はない。しかし江戸時代は、役者が客席から登場したり、客席に下りていくこともあった。舞台と観客が入り乱れて踊り、ときには騒乱状態ともいえる場を現出することもあった。また客席では飲食が行われるのが常態であり、観劇は宴席の一部であった。郡司正勝はこれを「饗宴性」と呼んだが、本研究ではその具体相を、多くの絵画資料を用いて明らかにした。

(5)「好色性・売色性」

歌舞伎の生まれ故郷は売色にある。初期の歌舞伎は売色を前提とした構成になっていた。舞台が終わった後、観客は劇場に隣接した遊里に赴いて、役者たちと酒席を共にし同衾する遊興の場をもった。初期歌舞伎の舞台では、観客を遊里に誘い込むため、容姿をアッピールする演技や、好色な台詞によって観客を刺激する演出が行われていた。本研究では、これを、文献資料や絵画資料によって明らかにした。

(6)「女方」

本研究では、今村久米之助と玉川千之丞という、二人の女方をとりあげて考察した。

今村久米之助は、色白で上品な容貌を持ち、高貴な女性の役で人気を博した。実生活では、小舞庄左衛門という年輩の役者と男色の夫婦生活を営んでおり、また売色を行う男娼宿のオーナーでもあった。本研究では今村久米之助に注目することによって、役者の生活実態を明らかにしている。

玉川千之丞は「女方の元祖」とも言われる、歌舞伎史上有数の女方役者である。『伊勢物語』の中にある「河内通」の妻の役を演じ、不実な夫に対する恨みと嫉妬の演技を開拓した。能楽では嫉妬の演技が「葵上」などに見られるが、嫉妬は鬼（般若）の仮面によって表現されている。千之丞は仮面を捨てて、素顔による嫉妬の表現を開拓した。当時の文献資料は千之丞の演技を「すさまじい」という言葉で激賞している。

(7)「見立て」

江戸時代の文化には、「見立て」という発想が随所に見られる。例えば落語家が扇子をくわえてタバコを吸う所作をするのが、扇子によるキセルの「見立て」である。初代市川団十郎は大名屋敷の障子を牢獄の格子に見立てて「景清牢破り」の演技を披露している。

現代の演劇では、役者は登場人物に、内面・外面ともに没入しようとするが、歌舞伎では役者と登場人物は距離を置いて位置し、両者は二重写しになる。これは役者「団十郎」の身体を、登場人物「助六」の身体に見立てているのである。本研究では、歌舞伎の演技の著しい特色は、「見立て」という発想に基盤を置いている点にあるのだと提言した。

本研究では、歌舞伎の特質・本質の何点かについて解明を進めることが出来た。その解明は、単に現象を解釈しただけのものではなく、文献資料・絵画資料・民俗資料をもとにし、実証的に押し進めることができた。この点が、従来の研究や評論にはなかった、本研究の独創性だと自負している。以上が本研究の成果である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

①武井協三、色白の女方 ― 今村久米之助の生涯、『近松研究所紀要』27 号 p.15-29、2017 年、依頼原稿

②武井協三、歌舞伎・浄瑠璃の絵画資料二題、『浮世絵芸術』166 号 p.38-47、2013 年、依頼原稿

〔学会発表〕（計　8　件）

①武井協三、日置貴之、ビュールク・トーヴェ、賀古唯義、シンポジウム「観客と共創する芸術―光・音・身体の共振の社会学的・芸術学的・工学的研究」における基調報告（「江戸の演劇空間―芝居小屋と大名屋敷―」）、2018 年 3 月 10 日、東京芸術劇場

②武井協三、山下〈高橋〉則子、光延真哉　シ

ンポジウム「デジタル時代の資料整理」の基調報告（「手作業からデジタルへ」）、2017 年 12 月 10 日、歌舞伎学会、早稲田大学
③武井協三、日置貴之、ビュールク・トーヴェ、後藤博子　パネル「歌舞伎と観客―17 世紀から 19 世紀の観劇体験」における基調報告（「歌舞伎における舞台と観客の交流（Kabuki as a banquet）」）と全体統括（ディスカッサント）、2017 年 9 月 2 日、第 15 回ＥＡＪＳ（ヨーロッパ日本研究学会）、リスボン・ノヴァ大学（Universidade Nova de Lisboa）（ポルトガル国）
④武井協三、赤間亮、和田修　シンポジウム「歌舞伎の見得」の基調報告（「歌舞伎の見得と仁王の真似」）、2016 年 12 月 3 日、芸能史研究会、早稲田大学
⑤武井協三、玉川千之丞について、演劇研究会、2016 年 4 月 2 日、同志社大学
⑥武井協三、近松からくり雑話、芸能史研究会例会、2016 年 1 月 8 日、キャンパスプラザ京都
⑦武井協三、断片の演劇―歌舞伎と人形浄瑠璃―（Theater of fragments - Kabuki and Ningyo Joruri-）、2014 年 10 月 17 日、日仏演劇学会、ストラスブルグ大学 CEEJA（フランス国）
⑧武井協三、歌舞伎・浄瑠璃の絵画資料二種、演劇研究会、2013 年 5 月 25 日、同志社大学

〔図書〕（計　1　件）
①武井協三、『歌舞伎とはいかなる演劇か』八木書店、2017 年、329 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
武井　協三　（TAKEI Kyozo）
国文学研究資料館・名誉教授
研究者番号：60105567

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
後藤　博子（GOTO Hiroko）
帝塚山大学・文学部・准教授
研究者番号：80610237

(4)研究協力者
（　　）